

GHQの戦後医療改革 と原爆被災調査

—原爆投下一ヶ月、広島に生命萌えいづ—

津山 直一

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：先生が終戦を迎えられたのはどちらでしたか。

津山：昭和20年8月15日、私は東京大学医学部の3年生でした。これから天皇陛下の放送があるから安田講堂に集まれ、といわれたのです。私は、恐らく沖縄は落ちる、敵は本土に上陸して来る、徹底的な戦いが始まるからそのつもりでいろ、というようなことに違いないと思っていました。音の悪いラジオから、「忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え……」、やがて最後に「ポツダム宣言を受諾する」と。それから学生たちの間にざわめきが起きました。「結局、負けたということじゃないか」「戦争はこれで終わりということか」。泣き出すヤツがいる、そんな馬鹿なと怒りだすヤツもいる、これで良かったんだというヤツ、その良かったというヤツを張り飛ばすヤツもいる……。その夜の下宿の雰囲気というものは、全くすごいものでした。

その玉音放送の直後には、厚木などで軍人の反乱が起きたりしました。しかし、燈下管制で真っ暗だった大学の夜に電灯がつき、秋が来始めるところ、私はああ死なずにすんだな、生きていけるんだなという、何ともいえない喜びを感じました。嬉しくないといったら嘘になる。

佐多：それまでは、やはり死を覚悟されていたのですか。

津山：それはもちろんです。9月には召集される予定でしたからね。しかし、終戦で日本は一挙に変わりました。GHQの占領政策のもとで、実に無節操に変わりました。民主主義を教えてくれたのも、婦人参政権を与えてくれたのも彼らです。

医学医療の分野にも、大ナタが振るわれました。まずは医学教育のレベルアップです。医師の促成栽培のために戦時中作られた急ごしらえの医学校が取りつぶされ、医学教育を6年間としました。そのうえで、オールラウンドのインターンを1年間、さらに国家試験をやれ、というわけです。それまでは、4年間の卒業証書イコール医師免許だったんです。ですから、我々は第一次のインターン経験者であり、初回の国家試験の合格者ですよ。

戦前の医学教育はドイツ式でした。ドイツ人教師からドイツ語で、ついでドイツ帰りの日本人教授から、"てにをは"だけ日本語の講義をうけました。「このクランケは、プレッツデッヒにザイテンパウホにシュメルツをクラゲンし、ディアグノーゼはアッペンディツティ



津山 直一 / つやま・なおいち

1924年、兵庫県生まれ。48年、東京大学医学部卒業。東京医科歯科大学助教授、東京大学医学部整形外科教授をへて、現在国立身体障害者リハビリテーションセンター名誉総長。

スアークタであった」という具合でした(笑)。いまはこれが英語になっていますが。そうかと思うと、軍人あがりの国粹主義者は「全部日本語でないといかん」といっていましたよ。自動車のハンドルを転把^{てんば}というように。とくに外科系の教授は尊大このうえなくて、弟子を怒鳴りつけたり、メスを投げつけるような独裁者でした。

それから私が一番感謝しているのは看護婦さんの三交替制です。「看護婦は24時間患者から目を離しちゃいかんのだ」というんですね。それまでは家族が患者に付き添っていて、例えば、夜中に「すみません、主人が痛がっています」と看護婦さんを起こしていたのです。もうひとつは麻酔科の独立です。従来、外科手術の時には麻酔当番が、教授に「血液が黒くなったぞー」「酸素を増やせー」と怒鳴られながら、麻酔管理していました。それを見ていた米国の医者が「手術をする時には、全身状態や心肺機能、麻酔の深さなどを第三者に管理させて、自分は納得のいく手術をやれ」「それも教授の独断ではなしに、助手と相談しながら、穏やかな雰囲気やれ」と指導しました。

このほか、終戦から戦後にかけて私は実に様々な経験をしました。しかし以上のような制度的改革の前に、広島と長崎の爆心地の調査があったのです。

佐多：その調査の時、先生はまだ医学生でおられたのですか。

津山：そうです。彼ら(GHQの調査団)は早く広島と長崎に行かなくちゃならなかった。今のうちに被害のなまなましいデータを集めて、原爆というものの実態をつかみたかったのです。それで、雑兵として、希望する学生を集めていました。我々は、このまま食料もないようなところにいるよりは、アメリカ式の医学を多少でも学べる機会と思い、それに応募したのです。9月に第一陣が行き、我々は第二陣でしたよ。長崎には九州大学の連中が行ったと聞きました。

佐多：先生は当時、原爆ということをご承知だったんですか。

津山：知りませんでした。なにしろ、ピカッと光ってドーンとあって、街中がつぶれたので、みんなピカドンと呼んでいたんです。が、物



図1:ピカ……ドン……市内から郊外へ、
ものすごいきおいで、一ばん先に走ったの
は牛たちでした



図2:爆心地の話をつたえてくれる人は、いません
(丸木位里、赤松俊子『ピカドン』1950.8.6.
ボツダム書店発行より)

理の学生たちは原子力だといいましたよ。飛行機一機で来て、爆弾一発で街全体が破壊されるなんて、原爆に違いない、と。

調査団は50～60人で編成され、汽車で広島県の宇品町^{うじな}に行きました。その時まず驚いたのは、米軍の物資の豊富さです。薬品、ジーブ、レーション(割当配給食料)……。つぎに感心したのが、衛生兵のレベルの高さです。血液の検査なんか、日本では医者がやっていました。それをオートマチックのアナライザーでやるんです。そういったことがたたきこまれているんですね。その彼我の差に愕然としましたよ。これじゃ、戦争に勝てないな、と。

佐多：調査はどのようなものでしたか。

津山：米軍の軍医将校がリーダーでした。彼は血液の専門家で、ニューヨークの街の開業医でした。そういう医者を取りたてて高位高官を与えて派遣していたのです。

まず爆心地から500メートル、1000メートルと同心円を描いて、生存者をシラミつぶしに調べて回りました。防空壕の中、全身火傷だらけで、放射能のために、髪の毛が全部抜けた女。焼けただれた皮膚に、粉みじんに割れたガラスがめりこんでいたり、ただれたところに蛆虫^{うじ}がわいていたり、実に見られたものではありませんでした。だいいち、広島に降り立って、ズーッと広島を見渡したとき、まったく何も無いじゃありませんか。全部こわれている。向こうの山肌まで焼けている。一発の爆弾であそこまでつぶせるとすると、本当に怖いものだと思います。その当時、放射能の影響で、広島に100年は生物が育たないとも言われました。でも、それはデマだったんですね。私が足を踏み入れたのは、投下から一ヶ月半後ですが、わずかに雑草が生えかけていましたから。放射能は指数関数的になくなるのですね。

しかし、その破壊の程度は、ミゼラブル(悲惨)の一語です。破壊力と熱と放射能の三つによるものです。車を引いて橋を渡る人物の姿がくっきりと灼きついて残っていましたよ。橋の上に影が、写真のようにね。

半径500メートル以内には、一人も生き残っていませんでした。1000メートルで一人か二人、大きなビルの地下室などにいて助かった人がいたようです。1500メートルになるともう少し多くなり、2000メートルではかなりの人数になりました。朝ドカーンと来て、



一瞬に丸焼けになって、何のことも分からずに、焼けただれたまま、郊外に逃げて行ったのです。その行き先まで、我々はジープに乗って追いかけて行って、血液の検査をしましたよ。

それから男は精液の検査、女は子宮内膜の検査をしました。こんなこと、よくできたと思うでしょう。米軍の食料と交換で、検査させてくれと頼んだのです。今でもよく覚えています。試験管を渡して「これにあなたのザーメンを採ってきてくれ」と。しかし「なんぼやっても立ちまへん」というわけです。するとアメリカの将校がすさまじいボルノを出してきて、「これを見ながらもう一回やってみろ」と。そうしたら「あ、出ました」と(苦笑)。その精子の数をカウントするんです。そうやってデータをそろえたものですよ。

血液のほうはリバウンド現象で、白血球の数が増えていたようでした。それが精液^{えし}のほうは、無精子状態というのか、精子がまったく動かない、壊死状態でした。放射能の影響は、造血器官より生殖器官のほうが大きいと感じたものです。

佐多：データはどうなったのでしょうか。

津山：日本との共同研究として、データは全部公表すると約束していたのですが、結局、渡してくれなかったですね。持ち逃げですね、悪くいえば。もっとも、いまは公開文書になっていることでしょうか。

佐多：広島では14万人の非戦闘員が亡くなられたと聞いています。

津山：そうですか。当時あれほど悲惨な大被害をもたらした原爆も、いまでは大学の実験室でも作れるようなものだそうですね。本当に怖いものです。

佐多：私が親しくしていただいている藤女子大学人間生活学部助教授の伊藤春樹先生のご発案から、イタリアのアッシジ及びペルージア両市(*)で同時開催されることになった広島・長崎原爆展(**)実現のお手伝いをしております。このこととの関連から、今日の先生のお話は大変貴重な証言のひとつとして、長く記憶しておきたいものと思います。

*アッシジは聖フランチェスコ大聖堂で有名なイタリア中部の町。

ペルージアはアッシジから車で30分ほどの歴史都市で、ウンブリア州の州都。

**広島市の予算によりイタリアではじめて、1997年3月から1ヶ月間開催される。

HRT（ホルモン補充療法）は、不老長寿の妙薬か？

石塚 文平

更年期とホルモン補充療法（下）

*女性ホルモンと女性の健康（ホルモン補充療法の効果）

前号より続き

さらに、長期的で重要な閉経後の健康上の問題として虚血性心疾患と骨粗鬆症の問題がある。虚血性心疾患は女性では閉経後に増加する（図2）。40歳代の各年齢の比較でも閉経後婦人では閉経前婦人よりも発生頻度が高い（図2）。虚血性心疾患の頻度はLDLコレステロール濃度と比例し、HDLコレステロール濃度と反比例するが、エストロゲン欠乏によりHDLコレステロール値は低下し、LDLコレステロール値は上昇する。その結果、atherosclerosis（動脈硬化）が促進され、心疾患の頻度が高まる。欧米のデータによれば、閉経後婦人においてHRT（ホルモン補充療法）は虚血性心疾患の頻度を約半分に減少させると言われる。欧米では虚血性心疾患の頻度が格段に高いため、この効果は絶大であり、米国では50-70歳代の婦人10万人につき5250人の生命が虚血性心疾患より救われる計算となる（表2）。日本人女性の血清コレステロール値は欧米女性よりも約15%低く、虚血性心疾患による死亡率も1970年代までの統計では8分の1にすぎない。しかし、最近の日本では女性の虚血性心疾患による死亡率の増加が男性に比べより顕著であることより、日本人女性においても近い将来虚血性心疾患が健康上の一大脅威となる可能性がある。最近の検討によって、HRTは日本人女性においてもHDLコレステロールの上昇とLDLコレステロールの低下をもたらすことが明らかとなっている。

女性の骨量は30歳をピークとして減少するが、減少速度は50歳頃より急速となり男性の約3倍となる。女性の場合、骨量を維持するための3大因子としてカルシウム摂取、運動とともにエストロゲンがあげられる。同年齢の閉経前後婦人の比較でも閉経後婦人で骨量が低下していることが知られている。米国では1500万人が骨粗鬆症で年間120万件の骨折が発生するという。また、日本でも骨粗鬆症の患者は500万人に達し、大腿骨頭部骨折の頻度は1987年の5万件より1992年には8万件へと増加している。エストロゲンの低下は骨代謝の亢進をもたらす、骨吸収が骨形成を凌駕することにより骨量が減少する。欧米では骨粗鬆症に対するHRTの効果が1960年代より報告されている。HRTは閉経後早期であれば骨粗鬆症に対し予防的効果のみでなく、治療的効果も発揮することも



石塚 文平 / いしづか・ふんぺい

1946年、東京生まれ。71年、昭和大学医学部卒業。慶応義塾大学病院産婦人科勤務、カリフォルニア大学サンディエゴ校生殖医学研究所留学を経て、現在、聖マリアンナ医科大学産婦人科助教授。

知られている。さらに最近のアメリカでの治験によればアルツハイマー病の予防にHRTが有効であることが明らかになったという。また、日本のある化粧品会社の研究によればHRTは閉経後の皮膚のコラーゲン、水分の量を増加させ、文字通りみずみずしさを取り戻すという。

家族形態の変化や女性の社会進出が進んでいることを背景として日本でも4-5年前よりHRTが一般化している。ある試算によれば現在、HRTをうけている閉経後女性は全国でおよそ10万人と考えられる。日本人におけるデータも蓄積されHRTは日本人の更年期障害、性交障害の治療、血中脂質の改善、骨粗鬆症の予防に有効であることがほぼ証明された。

HRTに関する最大の問題として1960年代より議論されてきたのが、子宮内膜癌の増加の問題である。エストロゲンの単独投与により子宮内膜癌は約10%増加する。しかし、最近では子宮を有する女性に対してはエストロゲンはほとんどプロゲステロンと併用されており、併用投与では子宮内膜癌の発生頻度はかえって減少することが確認されている。欧米では乳癌の発生頻度はHRTで増加しないことがほぼ確認された。

それでは、HRTは不老長寿の妙薬か？残念ながら、HRTが全ての老化を防ぐことは不可能であろう。しかし、老化のある部分を遅らせ、生活の質を向上させることは事実である。これも欧米のデータであるが、HRT施行中の女性の有病率はHRTを受けていない女性にくらべ有意に低い。HRTは万能ではないが、使い方によっては閉経後女性の大きな光明となる方法である。HRTを受けなくても若々しく、魅力的な女性はいくらでもいる。しかし、HRTが女性にあたえられた魅力的なオプションであることは間違いない。しかし、HRTには煩わしい不正出血などの問題もあり、閉経後婦人科学について専門教育を受け更年期外来を標榜する医師が行うのが望ましい。

*21世紀の社会とホルモン補充療法

出生数の減少は女性の高学歴化や社会進出にともなう晩婚化、

	相対危険率 (エストロゲン非使用者に対し)	10万人当りの 死亡数の増減
心疾患	0.5	-5250
骨粗鬆症	0.4	-563
子宮内膜癌	2.0	+63
乳癌	1.1	+187
計		-5561
計 (%)		-41%

(Henderson, 1986)

表2：閉経後婦人100,000に対する各疾患による死亡率に与える結合型エストロゲン0.625mg/日単独投与の効果

さらに男性社会に対する女性の反乱との見方もある。しかし、これにはさらに本質的な原因が絡んでいる可能性がある。文明の限界、生産性の限界に対する事前抑制であるとの考え方である。歴史的に、人類は人口増加に生産性が追いつかず、人口過剰になるのを、無意識的に戦争や間引きで調整してきた。また、かつては周期的に飢饉や流行病などが襲って自然に人口抑制をしていた。現在の先進国ではこうしたことはおこらなくなり、かわりにマルサスの言う意志的抑制によってパニックを抑制する自動装置が働くと考えられる。こうした意志的抑制はヨーロッパの数カ国ではすでに1970年代よりおこっており、日本でも江戸中期に一度起こったと言われる。

いったん高水準の生活を味わった現代日本人はその生活水準を保つためには、膨大な投資を必要とする子育てをものはやしなくなった。住宅問題一つをとっても、今後わが国において簡単な解決が得られるとは考えにくいのである。すなわち、わが国における少産化は大きな歴史の流れであり、簡単に反転するとは考えにくい。

一方、女性の高学歴化、都市化の伸展に伴う生活の外部的化、単身指向も進み、こうしたことはすべて少産化とともに女性のセルフイメージの変化をさらに助長するものである。

21世紀に入っても当分は人口全体に占める更年期以降の女性の比率は増え続ける見込みである。こうしたことを背景として、更年期以降の女性の医学が注目されはじめている。HRTとは、内因性のホルモンの生理的な欠乏を補うというこれまでにない新しい形態の医療、予防医学である。前述のごとく、卵巣の機能はその成り立ちから一定の期間しか持続しないように運命付けられていると言える。その持続期間は‘人生わずか50年’と見事に符合する。50年以上の人生は生き過ぎなのであろうか？その疑問は閉経後女性にエストロゲンを補充することが生理的なことか、非生理的なことかと言う疑問につながる。しかし、21世紀の社会は少産、長寿の形態を取らざるを得ず、50歳以上の健康、活力が社会の生産性を左右するようになることは間違いない。HRTが閉経後の女性の健康に有益であることは経験的に明らかになったと言える。HRTは神の摂理に反することなのか？あるいは、女性ホルモンの分泌が50年で途絶すると言う生物学的欠陥を自ら補正することは

ヒトにのみ与えられた特権なのか？われわれはHRTを注意深く行いながら、その答えを模索し続けることになるであろう。

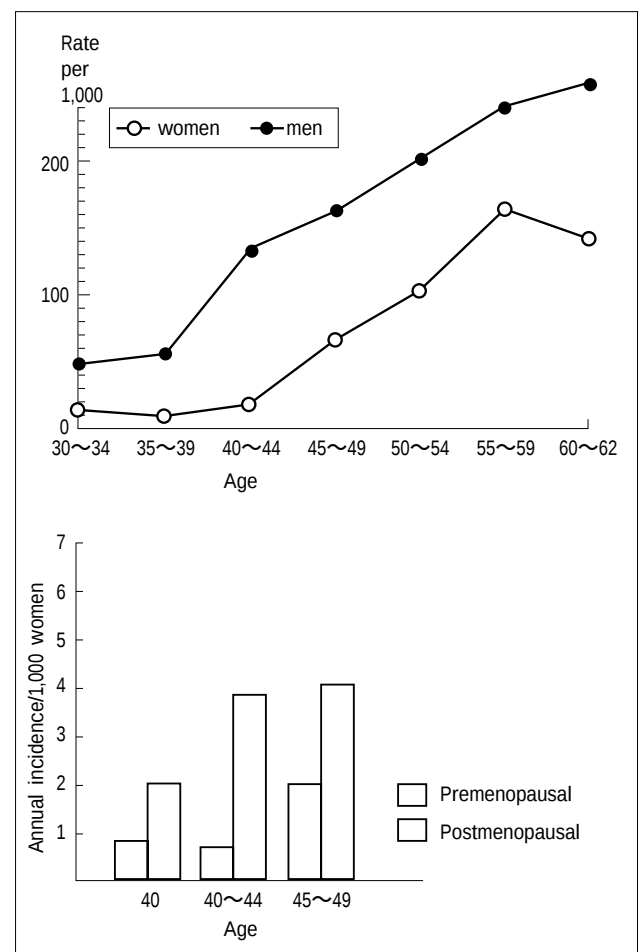


図2：年齢別心疾患発生頻度の男女比較（上：Castelli*）と40代女性の閉経前後における心疾患発生頻度（下：Lodo）

感染と人間 (5)

中田 光

医者ならば誰でも思い出があるだろう。日和見感染症の恐ろしさとそれを見逃したときの悔しさを。それは、ひたひたと音もなく忍び込み、患者が快方に向かったと思ったとたん姿を現し、奈落の底に陥れる。医療技術の進歩と新しい日和見感染症の出現とは、丁度二本の線路のようにどこまでも並走していきそうな気がする。

不器用さに苦しんだ研修医時代

「組織があるから人間がいるのではない。人間がいるから組織ができるのだ」と、大学病院の医局制度とそれに運命を委ねる大部分の同級生を生意気に批判していた私は、卒業と同時に東京の下町にある100床足らずのA病院の内科に就職した。

どこの大学病院の関連病院でもなく、血気盛んで型破りな医者が地域医療に情熱を傾けていた。中でも外科のB先生は、救急医療の分野で活躍しておられる実力派だった。私が就職して間もなく、B先生はY子さんという21歳の色白でぽっちゃりとした女の子の主治医となった。Y子さんは、自分でお腹の出っ張りに気付くほど進行した胎児性卵巣腫瘍で、間もなく手術となった。開腹すると、案の定、癌は腹膜やリンパ節に浸潤、転移しており、すでに手遅れの状態だった。それでも、B先生は可能なかぎり、転移した癌とその近くのリンパ節を切除して、術後の化学療法に望みを託すことにした。

回復を待って、Y子さんはその頃治験が終わって認可がおりる前のシスプラチンという制癌剤の投与をうけた。何回かの投与の後、Y子さんは腹膜炎を起こし、高熱を出し、敗血症によるショックとなって、心臓も呼吸も停止して死線を彷徨った。B先生は必死に心肺蘇生を試みてメチルプレドニゾロン(ステロイドホルモン)の大量療法により、辛うじて危篤を脱することに成功した。しかし、Y子さんは、お腹に入れた沢山の管から絶えず消化物と液が漏れでる状態のまま、寝たきりになってしまった。

秋になって、A病院は10Km程離れた埼玉県内に新病院が完成し、殆どの患者が移ることになった。Y子さんも救急車に乗せられて移っていった。私は、内科でA病院の研修を始めたが、生来の不器用さを解消し、血管確保や気管内挿管や小外科手術(簡単な手術)の手技をマスター

するチャンスと外科での研修を願い出ることにした。外科の先生の中には、私をお荷物と思う人もいたのだろうが、新病院ということもあって、猫の手も借りたかったのだろう、一応歓迎された。なにしろ、外科80床に常勤の医者が4人しかいなかった。しかも、そのうち一人は院長で、会議や公務に追われていた。手術は週3回の予定だったが、救急病院を標榜していたために、交通事故の骨折や頭部外傷など毎日のように緊急手術が行われていた。

こんな状態の中にあって、私は文字どおり、猫同然だった。B先生の後を追いかけて、次に何が起こるのか見えない、自分が如何に行動すべきかわからずに、よく怒鳴られた。そればかりか、やれといわれた手技も不器用さ故に緊張して手が震えてうまくできなかった。周囲の苛々を絶えず意識しながら、次第に寡黙に心を閉ざし、患者を思いやるよりも、自分のプライドを保つことに汲々としていた情けない医者だった。

頻脈の謎

そんな中で、回診と包帯交換は患者の回復を診ることができ、心が救われる時間だった。しかし、Y子さんの病室だけは入りづらかった。B先生は厳格で誠実な人で、どんなに忙しくてもY子さんの包帯交換はご自分でされていたからである。一度、B先生が手術で手が空かない時、婦長に頼まれて代行したことがあったが、後でこっぴどく叱られた。「包帯交換は、単なる処置ではない。傷の状態を診るための大事な診察なんだ」とおっしゃった。Y子さんはお腹から漏れでる消化液をポンプで持続吸引する状態が続いていたけれども、頻に赤みが戻り、徐々に回復しているようだった。彼女は、「クリスマスにはケンタッキーのフライドチキンを食べたい」と言って、私たちを喜ばせた。

70年代から普及した中心静脈栄養という画期的な技術のおかげだった。鎖骨のすぐ下の皮膚からカテーテルを入れ、鎖骨下静脈内に進めて先端が心臓のすぐ近く、上大静脈あたりにくるように留置する。普通の上肢からの点滴だと、せいぜい三日も留置針を入れたと静脈炎を起こして流れなくなってしまうが、この方法だとカテーテルがつまらない限り、ずっと点滴を流しておくことができる。その上、上肢からの点滴

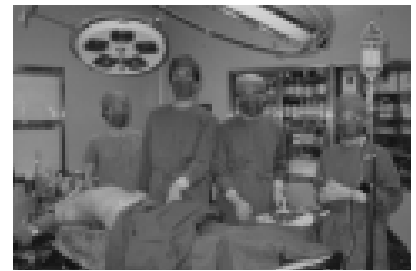


写真1: A病院での外科研修時代

中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。米国ニューヨーク大学ペルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

では流せないような、高濃度の糖液やアミノ酸、脂肪液を点滴することができ、Y子さんのように経口摂取による栄養摂取が期待できない患者にとって、まさに革命的技術だった(図1)。

歳末になって外科は交通事故や脳卒中の患者がつぎつぎに運ばれてきて満床となりますます多忙になっていた。しかし、病棟は、昼間は医者が殆ど手術室やICUに入っていたため、無医村と言っても過言ではなかった。私も麻酔を担当したり、手術の助手をしたりで、昼間は入院患者を診る余裕がなく、消灯が過ぎる頃によくカルテと温度盤を見て患者の容態を知る日々だった。クリスマスが過ぎてY子さんは、40度近い熱が出るようになっていた。熱は弛張熱(上ったり下がったりする熱)で、抗生剤をセフェム系からペニシリン系に切り替えた直後は一時的に解熱したが、すぐにまた、高熱を発するようになった。Y子さんの温度盤はとても不思議だった。高熱を出しているとはいえ、脈拍が常に120以上あり、熱がさがっている時でも変わらなかった。その上、普通発熱していれば大きくなるはずの脈圧(最高血圧と最低血圧の差)がとても低かった。どういう病態なのか的確に把握することが出来なかったけれども、何かとても重大なことが進行しているのではないかと、B先生に「このまま放置しておいてよいのでしょうか?」と進言した。「この子の脈は以前から速いんだ。心配ない」というのがB先生の答えで、主治医のしかもベテランの先輩にそう言われると、新米の私は黙るより外はなかった。

剖検室の寒さ

ところが、Y子さんは年明けて間もなく、突然心室細動(心臓が痙攣し、血液がうまく送り出せなくなる状態)を起こして、蘇生の甲斐もなく亡くなった。B先生は家族の了解を得て閉じこもって病理解剖を始めた。私は、どうしても疑問に思っていた頻脈の原因を知りたくて、遅れて恐る恐る剖検室のドアを開いた。B先生は、早春の寒々とした剖検室の中で一人ご遺体を縫

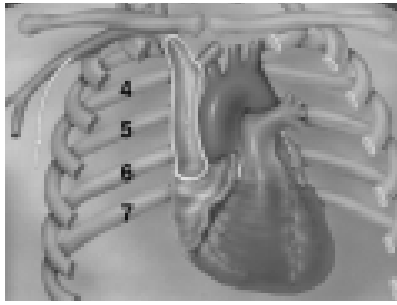


図1：中心静脈栄養療法

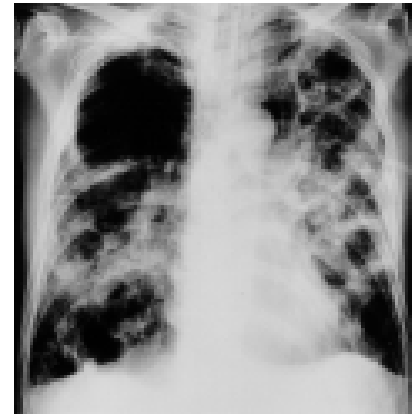


写真3：中心静脈カテーテルからブドウ球菌が侵入した肺炎
たくさんの空洞をともなった炎症巣が肺にみられる

合しながら、泣いていた。「中田君に言われたようにもっと調べておけばよかった。心タンポナーデだ」と一言おっしゃって、その後言葉が続かなかった。畏敬の念を抱き続けていたB先生の別な面を見たような気がして、胸が熱くなるのを感じながら急いで医局に戻り、久々に机に向かった。悔しいことに内科学の教科書に全ての答えは書かれていた。Yさんの心臓は心内膜炎から筋炎、心膜炎へと発展し、浸出液が心膜と心筋との間に貯留して、心臓の拍動を妨げている状態、すなわち心タンポナーデだったのだ。心臓は一回の拍動で送り出す血液量が減った分を脈を多くすることで代償していたのである。その後、遺体の中心静脈カテーテルの先端からブドウ球菌が検出されて、炎症の原因が明らかになった。菌はおそらく、鎖骨下のカテーテル刺入部位から侵入してカテーテルづたいに心臓まで達してそこで増えたのだろう。

その後何年か臨床の経験を積んでいくうちにカテーテルを介したブドウ球菌の敗血症は意外と多いこと、それを防ぐためにヒックマンカテーテルという新型のカテーテルが開発されていることを知った(写真2)。ブドウ球菌は鼻腔や咽頭、皮膚などに誰もが持っている常在菌(子供ではよく夏期にとびひを起こす)であるが、一旦体のなかに侵入すると、持ち前の毒性を発揮して暴れまわり、敗血症を起こして、肺や心臓、肝臓などの臓器を破壊して死に至らしめる恐ろしい菌である。生理用タンポンからの感染でショックになることで知られた毒素ショック症候群もこの菌によるものだし、院内感染の原因菌として、恐れられているMRSAも薬剤耐性のブドウ球菌である。この菌の特徴は化膿病巣を作りやすいことと、短期間にどんどん大きくなって、他の部分に次々と転移していくことである。抗生剤も敗血症の状態になると、たとえMRSAでなくとも大変効きづらくて死亡率は60%に達するといわれる(写真3)。

「日本の細菌感染症の時代は終わった」と思いこんで、癌や成人病にばかり気を取られていた私にとって、この事件は感染症の恐ろしさを知った最初の経験だったかもしれない。死は、患者さんにとって非情であったが、私にとっても非情だった。研修医だからといって、経験が浅いからといって、死は待つてはくれなかった。

それは容赦なく自分の無力さや不勉強を思い知らせた。こうしていろいろと思い悩んだ末に毎日が嵐のようだったA病院をやめて、研修二年目には知り合いから紹介された医科学研究所付属病院で内科をじっくり勉強しようと決心した。

米粒大の発赤

医科研病院の内科は感染症と血液の二講座で、入所するなり重症の再生不良性貧血の患者さん二人の主治医となった。骨髓の血液を造る機能が弱くなるために貧血ばかりでなく、白血球や血小板が極端に少なくなって感染しやすくなり、出血が止まらなくなる重篤な疾患である。二人の患者さんは根治療法である骨髓移植を受けるために待機していた。医科研では、前年から骨髓移植が始まっており、二人は5例目と6例目の患者さんだった。うち一人は少年で、予定どおり妹さんから骨髓を採取して移植し、着生(骨髓が拒絶されずに増え始めること)して順調に回復していた。もう一人は、I(アイ)さんという成人男性で、私が入所したときには、すでに輸血によるC型肝炎を合併していて、倦怠感と黄疸に苦しんでおり、移植ができるかどうか微妙な状況だった。ところが、肝炎はいくつかの治療により奇跡的に軽快し、全身状態が改善して、その年の9月末にIさんは骨髓移植を受けた。

通常、骨髓移植前には患者に大量のエンドキサンという制癌剤を投与して、残っている骨髓を空にすると同時に移植される兄弟の骨髓が拒絶されないように強力に患者自身の免疫を抑制するのである。人為的に高度の免疫不全状態を作るわけだから、移植は無菌室内で行われ、移植後もしばらくは無菌室の中で暮らして、移植された兄弟の白血球が血液中に増えてくるのを待つのである。大体、この期間は一ヶ月ぐらいだが、Iさんの白血球はなかなか増えてこなかった(図2)。そればかりか、徐々に熱が高くなり、40度を越える熱が10日間も続いた。血液培養を繰り返したがいずれも病原菌は検出されず、私は焦って、着任されたばかりで細菌感染症が専門だった島田馨教授に相談した。島田先生は、Iさんの熱型を見ながら、「これは、絶対にどこかに感染源があるから、頭のてっぺんからつま先までよく診察しなさい」とおっしゃった。

私は、目の部分だけが露出した宇宙服のよう

な滅菌ガウンを着て無菌室に入り、熱で疲れ切ったIさんの毛髪の毛穴一つ一つから、目、鼻、口、耳と丹念に診た。こうしてよく診ると、人間の体というのは、診るところが沢山あるものだ。15分ぐらいたったのだろうか？色黒のIさんの体は体温以外はどこも異常が見あたらなかった。ふと、顔をあげてはっとした。島田先生が無菌室の外からガラス越しに私の診察をずっとご覧になっていたのである。インターホンをを使って「先生、何処にも異常が見あたりません」と申し上げた。「いや、絶対にあるから、もう一度よく診なさい」とおっしゃった。私はもう一度頭のてっぺんから診始めた。やがて、肛門のすぐ脇に米粒大の淡い発赤を見つけた。しかしながら、こんな小さな発赤が高熱の原因とはとても思えなかったので、「発赤があるにはあるのですが、小さくて膿が採れるかどうかわかりません」と島田先生に告げると、「かまわないから、そこをメスで切開して膿をプレパラートに塗りなさい」とおっしゃった。発赤から出たのは膿ではなく、殆ど血液に近かったが、私は半信半疑で島田先生のいわれとおりにした。パスボックス(無菌室と外をつなぐ小窓)を通してプレパラートを受け取ると検査室で観てくるからとおっしゃって、先生は足早に立ち去った。島田先生はこの間、のろまな私の診察をいらした様子もなく、30分以上、無菌室の前に立って検体を待っておられたのだった。

無菌室を出て、検査室に行くとき検査の安達さんと島田先生が顕微鏡を覗いていた。あの発赤から取ったサンプルには沢山の桿菌(棒状の菌)がいたのである。よく考えてみれば、Iさんは殆ど白血球がなかったので、膿が出ないのは当

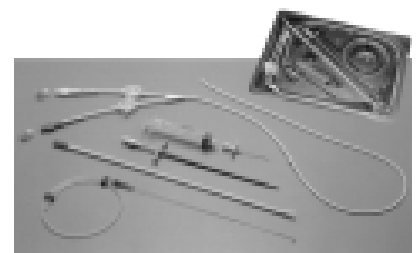


写真2：ヒックマンカテーテル
(株)メディコン/Bard Access Systems., Inc.

然のことだった。安達さんは大きな形態から多分、緑膿菌だろうといった。島田先生は、ご自分の部屋から当時まだ市販されていなかった「イミペナム」という緑膿菌によく効く抗生剤を持って来られて、Iさんに使うように指示された。Iさんは翌日から解熱し、間もなく白血球が増え始め、無菌室から出ることができた。

島田先生が無菌室の外でずっと立っていてくれなかったら、私は最初の診察であきらめてしまって、感染症は発見できず、Iさんはきっと助からなかっただろう。Iさんには、元気になってから経緯を話したところ、感激していた。有り難いことだが、島田先生はきっと私が途中で感染症の探索を諦めてしまうのではないかと

見抜かれてずっと立っておられたのであろう。そう思うとちょっと悔しい。

(つづく)

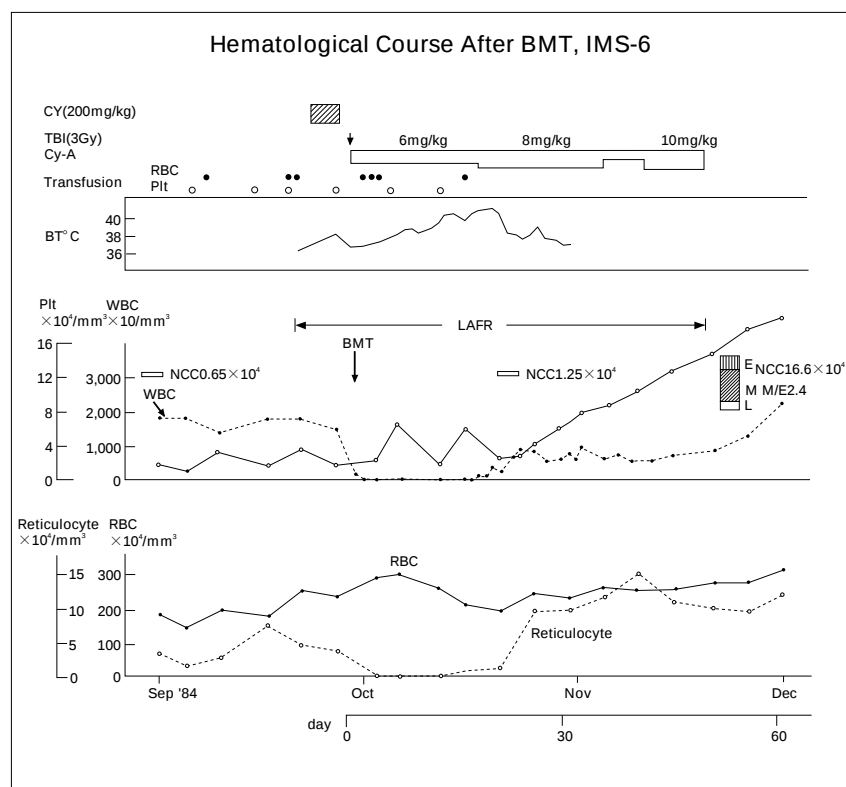


図2: Iさんの経過

「野のはな」ものがたり

—主婦たちの町おこし—

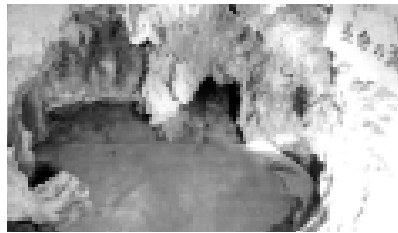


写真2: 世界一の透明度の水をたたえる龍泉洞



写真3: 「アトリエ野のはな」代表 坂本ゆりさん

村おこし、町おこしの掛けぐえが聞かれるようになって10年以上になる。むかしからの名所旧跡だけでなく全国どこに行っても、村おこし運動のなかで立てられた看板や地域振興の目的で売り出された特産品を目にする。いわゆるバブル経済が崩れた結果、廃墟と化したリゾートなどもある一方で、地域にしっかり根付いた町おこしはますます意気軒昂といっていだろう。そんな村や町の姿は、根っここのところ日本人を元気にさせる力をもっている。

今回縁あって取材した、岩手県岩泉町「ア

トリエ野のはな」の主婦たちはドライフラワーをリースなどを造って全国へ出荷し、それによって同時に元気の素も振りまいている。

日本のスイス

岩手県岩泉町はかつて日本のチベットと言われたこともある、山奥の閉ざされた町だったという。だが今はJR盛岡駅からバスで2時間半、ヨーロッパの田舎を想わせる清潔ですがすがしい、樹木の豊かなところだ。

越えるのがホネだった時代もあっただろう早坂峠の風景は、どこか宮沢賢治の世界を彷彿とさせる。高原の立木のむこうは『どんぐりと山猫』の山猫が、めんどな裁判するためにキノコ型の馬車に乗って飛んで来そうな青空だ。白い雲がぼっかり浮かんでいる。近くにある鍾乳洞・龍泉洞は日本一深い120メートルの地底湖を擁する。ここのお水はさぞかし美味しいだろう。

岩泉は広い。東京23区と横浜市がすっぽり入るくらいの土地に人口が約15000人。昔から酪農が盛んで（＊1）、「南部牛追い唄」発祥の地といわれている。

町の入り口には「森と水のシンフォニー」という控えめな看板が立てられている。龍泉洞から流れてくる驚くほど透明感のある川のほとりに「アトリエ野のはな」の工房はある。この寒そうなモルタルの建物は昭和初期に建てられた土木事務所だったという。が、ものは考えようだ。スタッフの女性たちは「古い建物だからこそみんなで協力しあって改良し、暖かく居心地のいい場所にしてきた」、「おばけ屋敷といわれたところだから、余計に創造性が湧く」と愛着ぶりを口にする。

工房に一歩足を踏み入れると、天井にも棚にも壁にも床にも、所狭しと吊るされ掛けられ置

かれた、花、花、花、花……。ドライフラワーへと加工途上のもの、リースやバスケット、ブローチのような製品になろうとしているもの、出荷を待つ山のような花束、キルトのクッション、リバティプリントの手芸品、参考文献の書籍や写真集などなど。女子中高生ならずとも「きゃーかわいい！」と叫びたくなる。

花の館

この花の館の主、坂本ゆりさんは幅広い女性の心を魅了し、近隣の主婦たちとともに旧土木事務所を花一杯の工房「アトリエ野のはな」に変身させたバイタリティの持ち主だ。ゆりさんが15年前手掛けたムギワラギクのリースが岩泉町の産業祭で町長賞を受賞した時から、ここ岩泉でドライフラワー熱が巻き起こった。家庭学級でドライフラワー教室を開いたら、この住居の点在する町で120人もの女性が殺到した。そして折も折、中小企業庁の村おこし事業が盛んになっていた時期と重なって、女性による村おこしとして、このドライフラワーと草木染めの毛糸が地域の特産品になっていったのだ。當時を振り返ってゆりさんは「そのころは岩泉にあまり明るい話題がなかったところに、ドライフラワーという15年前にしては新しい世界を開いたみたいなのが評価されたんだと思います」と語る。

ゆりさんを中心に、10人前後の主婦たちがドライフラワーに取り組んでいる。皆パートタイムのかたちで、それぞれに自分の都合のいい時間にここに来る（＊2）。手を忙しく動かしながらも、にぎやかなおしゃべりが続く。実に楽しげだ。手芸や手仕事の好きな女性なら、時のたつのを忘れるだろう。クリスマスの前などは、殺到する注文をさばくのが大変なようだ。



写真1: 「アトリエ野のはな」の工房



写真4:花で一杯の「アトリエ野のはな」工房の内部

しかしゆりさんははじめから、特産品にしようと思って花を作ったわけではない。ただ、小さいときから大好きだった花を作りたい、ただその一心だっただけである。だが200年も続いた農家の嫁であるゆりさんに周囲の目は厳しいものだった。

花が作りたい

ゆりさんは東京新宿区で生まれ田園調布で育ち、普連土学園と恵泉女学園で園芸を学んだ。獣医であるご主人と北海道で12年間暮らした後、ご主人の郷里である岩泉町に移って来た。

ところがその当初は、友人もなくボツンと一人、あまりにも淋しい環境の中、身体がマヒして動けなくなるほど落ち込んでしまったという。「もともと楽天的な私ですが、当時はなぜか悪いことが続き、故里に帰って来たのにどうしてこんな目にあわなきゃいけないんだろうと思うと本当につらくて……。今思うと、自分は農家の嫁なんだから、ここに来たら、みんなの言うとおりにしなきゃいけないんだ、と自分で自分をがんじがらめにしていたのです」。

心から楽しく笑えなければ、精神的なストレスはたまる一方だ。「それは多分、女性は少女のころから夢を持って育っても、結婚して子育てをして、それに一生懸命になっている最中に、自分を見失ってしまうことがあるんですね。『私って一体誰なんだろう』と思うことが女性にはある。妻でもない母でもない嫁でもない、私って一体だあれと思った時、子供時代から培ってきた自分が出てくるんだと思います」と、ゆりさん。

ゆりさんは小さな時から花が大好きで園芸を勉強し、『赤毛のアン』のアン・シャーリーのようにならなくても夢を失わず、周囲を明るくしてき

たのだ。クヨクヨするよりニコニコしたほうが楽しいに決まっている。その時、実家のお母さんの、結婚へのはなむけの言葉「どんなに好きな人と結婚しても、結婚は生活なのよ。だから、自分の世界をもちなさい」という言葉がよみがえってきた。

当時岩泉には、閉ざされた山国では何をやっても駄目なんだ、という暗い雰囲気があった。また、いいお嫁さんとは野菜を作って現金収入を得るもの、という考えかたが根強くあり、花なんかゼイタク、と言われた。しかし、ゆりさんはどうしても花が作りたかったのだ。

ムギワラギク＝黄金の太陽

ゆりさんが選んだ花は、普連土学園時代の記憶の中に輝いていたムギワラギクという花だった。花に珪酸質が含まれていてカサカサ乾いており、摘み取っても色が全く変わらずキラキラ光っている。学名をヘリオクリッサム、意味は黄金の太陽という。ゆりさんは「黄金の太陽が冬も輝いていたら素敵だろうな」と思った。次第に、この花を特産品にしようという考えが頭をもたげてくる。「本当は花で遊んでいたいんだけど、農家の嫁がと許されない、なら仕事にしちゃおう」と。しかし周囲では誰も信じてはくれなかった。ゆりさんは一人でがんばって、東京の六本木の恵泉フラワースクールに10万本のムギワラギクを出荷する計画を立てた。もし失敗したら……。しかし、お姑さんは「失敗したら、また来年やればいいじゃない」と言って励ましてくれたという。

種を蒔いたのは山の上の水でもでないようなところだった。しかし、その年のムギワラギクの花は、もう二度とお目にかかれないうほど、それはそれはきれいに咲いた。近隣では「今度

来た嫁は草を植えているそうだ」などとウワサされたが、「いいじゃないか。うちは明治時代から草を植えている家だ（酪農家だから牧草を植えている）」と、お舅さんもかばってくれた。「今考えると不思議な気がします。でも、あの時わたしはよほどつらかったんだと思うんです。もう無我夢中だった」とゆりさん。周囲の愛情が注がれて、花というかたちに結実したのだろう。

それは誰もがびっくりするような大冒険であり、誰もがうらやむような大成功だったのだ。

新しい風土を創る

「アトリエ野のはな」の名は、新約聖書の『マタイ伝／山上の垂訓』の中の「野のはな（文語体では、ゆり）を見よ」から付けられたという。神は野のはなでさえあのように美しく装って下さるのだから、人間にそれ以上のことをして下さらないことがあろうか、だから明日を思い患ってはいけない、という意味だ。ゆりさんは、「わたし自身がクヨクヨして病気になったときに、自分の名前から、思い患っちゃいけないんだということに気がついて、自分を叱咤激励する意味でつけたんです」と笑う。

ゆりさんと10数人の主婦たちでスタートした工房は、必ずしも平坦な道を歩んだのではなかった。女性たちの集まりが、単なる趣味のグループに終わらず、13年も続いて来た秘訣はなんだろうか。「振り返れば、それはいろんなことがありました。結局、うちのメンバーはみんなそれぞれに平凡な主婦たちですけど、自分自身というものを持っています。出会いのなかで自分自身に気がついてきたのです。それは人間ですから時にはケンカもしますけれど、最後のところは信じ合い、助けあってきました。アトリ



写真5: 工芸館内の「アトリエ野のはな」コーナー



写真6: 新しく建てられた工芸館「ふるさと体験工房」の看板の後ろに植わっている花がムギワラギク

工野のはなのテーマは、仲よく、家族（花族）になることです」。

村おこしという、その土地に生まれ育った人でなければという考えが根強いものだ。しかしゆりさんは「アトリエ野のはなは、風の人と土の人とで作っているんです。私たちのように外から来た風の人と地元で生まれ育った土の人がともに新しい風土を創っていったということなんです」と語る。土地のものを大切にすると同時に、そこに新しい発想が加味されることが必要だ。例えば、松ぼっくりといえば、岩泉では薪^{たきぎ}としか思わないが、工房ではこれに、どんぐりやきれいなリボンをあしらって木の実のブローチを作っている。ラベンダーを縫いこんだリバティの布と松かさで作った「森のピンクッション」もヒット作だ。地元の人だけではなかなかカラを破れない。が一方、外の人だけが集まっても、地域に根付くとは思えない。

そういえば、宮沢賢治の『風の又三郎』の又三郎も、ドゥーと吹く風とともにやって来た。彼の存在がどれほど土地の子供たちの心をワクワクさせたことか。

ヒーリングプレイス（癒しの里）

一昨年からゆりさんは東京一岩泉間を数十回も往復した。子供の頃からかわいがってくれた二人の伯母さんが病に倒れ、一人は亡くなったためだ。仕事と介護に追われながら、ゆりさんの考えたことは「東京のほうが医療は進んでいるかも知れないが、岩泉のようにいい空気といい水があり、よく知っている人のそばで暮らすのが一番」だ。考えることは誰でも考えるかもしれないが、それをすぐ実行に移すのがゆりさん流か（?）。自宅の横にケアハウスを建てることにする。盛岡ケアハウスの所長さんらの協力

を得て、この春着工した。

いま、ガーデニングブームといわれ、ヘルマンヘッセの『庭仕事の愉しみ』（草心社）がベストセラーになっている。庭仕事・花づくりを通して瞑想し、自然のなかで心の底から癒されていく。ヘッセは「私たちの心が環境の姿をどんなにひどく加工し、変造し、というよりもむしろ修正してしまうものであるか。そして私たちの生活の思い出の姿がどんなに強く内面から影響を受けるものであるか……」「あるがままの自分自身、それが故郷だ。そこに幸福がある」と述べている。

岩泉でドライフラワーのクラフトづくりや他の手工芸が体験できる工芸館（写真6*3）の前には、あと2年がかりで、ハーブ園や市民農園ができる。花づくり、ドライフラワーづくりを一貫して体験できる体験ゾーンになるという。「自分でも癒されて、ここを訪れてくれた人たちもまた癒される場所ができるというのが一番嬉しい」とゆりさん。ゆりさんは自己回復を自分だけにとどめず、周囲の人々のために役立たせ、地域振興に大きく貢献している。「私たちはドライフラワーといわず、ドラマチックフラワーといっています。それは、これからのドラマをまだまだ続けていきたい、という思いを込めています。決して終わることのない花物語が続けられる場所。それにふさわしいのが岩泉だと思います」。

高齢化社会を迎え、村おこし運動は地域の高齢化対策抜きに考えられない。「これからは福祉の時代ですから、花をとおした高齢化社会の福祉というかたちをしっかりとみていかないと。これが私たちのテーマだと思っています」と語る。夢が夢に終わらず、地域の中でひとつひとつ形になっていく。

豊かな自然と人々の創意によって作られる、ヒーリングプレイス（癒しの里）には、多くの人を訪れる。一度訪れた人は、今度は自分の場所に持ち帰って種をまき、いつか花を咲かせる。そんな花があちこちで見られる日がきっと来るだろう。

*1

岩泉は日本の酪農発祥の地

*2

「アトリエ野のはな」の女性たちは20代～60代、総勢15人で、農園、工房、教室の三部門をこなしている。教室は、岩泉と盛岡の三ヶ所にある。

*3

木工、陶芸、ハムソーセージ作り、織物、手紡ぎ毛糸などが体験できる。

F A I T H

—日本人とキリスト教—

遠藤文学の魂

奥村 一郎

狐狸庵の別名で親しまれてきた遠藤周作さんが帰天されて三ヶ月近くになる。告別式の日はずばらしい秋晴れの10月2日。カトリック教会の典礼では、「守護の天使」を記念する日であった。教会の神学では、すべての人にひとりづつの守護の天使がついてくれていると信じられている。あの美しく、悲しかった日は、東京・四谷教会の周辺を三列になって長い垣をつくる7000人もの参列者とともに、天使の「レクイエム」の葬送曲にのせられて安らかに神のもとに帰られたことであろう。

『沈黙』と「第二バチカン公会議」

遠藤さんと同年であるわたしは、かなり前から知りあっていた。というのも、戦後まもない頃、二人が前後して同じくフランスに旅立ってから、遠く近く、その消息を耳にしていた。遠藤さんは文学研究、わたしはカルメル会の修道院に入るためであった。それに、当時遠藤さんが研究目的にされていたF・モーリャック (1885～1970) が、ブドウ酒で名高い町ボルドウ近郊にあったカルメル会修道院付近に住んでいた。そのこともあって、修道院を訪ねてこられたことも耳にしていた。しかし、とくに身近に感じるようになったのは、問題作『沈黙』が掛けにされた頃からである。1966年のこと、カトリック教会にとって最も大きな画期的出来事であった「第二バチカン公会議」(1962～65) 直後の年である。

平均、100年に一度ぐらいしか開かれない、カトリック教会の公会議は、西欧を中心とした世界状況の大きな転換期のある毎に、教会の刷新と、新しい路線を決定するため、世界的規模で総力を結集して行われる重要な会議である。「第二バチカン公会議」の新しい方向づけのスローガンは、「開かれた教会」ということであった。ここで「開かれた」というのは、単にキリスト教の宣教のことではない。一方通行の開かれ方なら、初代キリスト教のときから、いつどこでもなされてきたことである。そこで問われたのは、従来のカトリック教会の独善的、閉鎖的、排他的姿勢のことである。その旧弊を破ることが「開かれた教会」ということである。まず、キリスト教の中での超宗派対話による「教会一致 (エキュメニズム)」の働きかけ。次に、他宗教に対して開く「宗教対話」と、社会活動のための諸宗教との協力。三番目には、当時なお国際世界に大き



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所) など多数。

な支配力を及ぼしていた無神論共産主義との対話を拓くことであった。この、宗教およびイデオロギーの対話は文化と切り離せない。そこで各国の各民族固有の文化が福音の血となり肉となるようにする「文化的受肉 (インカルチュレーション)」という課題がでてきた。つまり、バタクさいキリスト教とか、ときに「文化的植民地主義」というような手厳しい批判がカトリック教会の内外で強く出てくるようになった。その頃に力強い警鐘を鳴らしたのが遠藤さんの『沈黙』であった。

ころび切支丹の宣教師フェレイラは寂しそうにいう。「私には、だから、布教の意味はなくなっていった。たづさえてきた苗は、この日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐っていった。私はながい間、それに気づきもせず、知りもしなかった」

そのような日本人、そのような文化の反キリスト教的体質を素材とした『沈黙』の著者は、最後に「踏絵」の場面の描写において、さらにパンチのきいた決定打を放った。

(踏むがいい) と哀しそうな眼差しは私に言った。(踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから)

その時彼は踏絵に血と埃とでよごれた足をおろした。五本の足指は愛するものの顔の真上を覆った。この烈しい喜びと感情とをキチジローに説明することはできなかった。.....

その頃、わたしも何度か『沈黙』の読書会に呼ばれて討論をした

こともある。やがて、いくつかの外国語に翻訳されてくると、もともと陽性文化の議論好きな宣教師や神学者のあいだで侃侃諤諤、とくに「殉教」の真の意味について論議された。発想の視点は、すでに芥川竜之介の『奉教人の死』に近似したものがあったが、熱心なカトリック者としての遠藤さんの力作であったということと、折も折、カトリック教会が「第二バチカン公会議」を通して「文化的受肉」を公式の姿勢として宣言した時であったことから、『沈黙』が投じた波紋は大きかった。

盛んな日本人論、日本文化論の中で

それから5年もたたないうちに、イザヤ・ベンダサンの匿名で出された、『日本人とユダヤ人』は、学問的かつ極めて独創的な発想のもとに、日本におけるキリスト教の宣教不可能論を鋭く打ちだし、火に油をそそぐようなことになった。周知の「日本教論」である。聖書学者としても知られた故山本七平の持説といわれる。

この60年代の後半から、一方で日本人論、日本文化論が盛んになり、キリスト教の宣教にとっては逆風となる困難な時代となつて今にまで至っている。その間も遠藤さんは、最後の書『深い河』に至るまで、独自の日本文化論の線で精力的な創作活動をつづけられた。そこに一貫するものは、こよなく愛する日本人の心にキリスト教を根づかせたいという願いであった。わたしにも何度か「対談」の機会が与えられたり、また、主宰しておられた「芸術センター」にも招かれて、代表的な知識人の集まりの中で「仏教とキリスト教」について話をさせてもらったことがある。他界後まもなく朝日新聞の『天声人語』にその逝去がとりあげられたが、「遠藤にはカトリックの支柱が、ずっと通っていた」と結ばれていた。また、「いろんな主題をつぎつぎと書くなんてことはできないんだよ。結局人生の中で探しているものは、同じものなんです」という遠藤さんの言葉もそこに引用されていた。(1996年10月1日付「天声人語」) 文化的受肉

「同じもの」、わたしが出会った遠藤さんが生涯求めて変わらなかったもの、それは、キリスト自身との出会いであったように思う。キリストは、神というだけのものではない。人間となった神、すなわち、人間の尊厳と悲惨とを、もろに身にうけた神の子であった。

また、ヘブライ文化の伝承に生きたユダヤ人でもあった。日本人にも、2000年をさかのぼる文化伝承がある。糧なくして命は保たれない。そのように福音の命であるキリストが、この日本において生きるためには、その伝統文化の糧をとらなければならない。そのことが、先にもあげた「文化的受肉」ということである。

昼と夜、太陽と月ほどに異なる東と西の文化は、対立するものではない。共に生かされて、キリストの愛による全人類の救いの神秘を露わにする時がいつかくるにちがいない。狐狸庵先生は、自分を笑うことのできるユーモアのなかに、病む人、貧しい人、悲しむ人の心を汲み、その人々と共にあるキリストの愛に生かされた信仰の道をひたぶるに歩き抜いた。

残された、その豊かな文化遺産が、日本の明日をつくりだす原動力となることを願ってやまない。

BRETT WESTON

ブレット・ウエストン

FORMS

1.13 MON - 2.28 FRI, 1997

フォート・ギャラリー・インターナショナル

土・日・祝 休館
11:00 AM - 7:00 PM
PHONE 03-3501-9123



P.G.I. 芝浦

川田 喜久治 作品展
「ゼノン:ラスト・コスモロジー」
11.12 TUE, 1996 - 1.24 FRI, 1997

第2・第4土曜日・日・祝 休館
11:00 AM - 6:00 PM
PHONE 03-3455-7827



PHOTO GALLERY
INTERNATIONAL

写実と幻想を織りまぜた作家 マルセル・エーメ

島野 盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち (5)

パリからブルゴーニュの首都ディジョンに向かってヨヌ河沿いに東南に進むと、そのほぼ中間地点にジョワニーという町がある。

ブルゴーニュ地方の西北部でパリから150キロのところ。ここで20世紀のユニークな作家、マルセル・エーメ (Marecel Ayme) が生まれた。正確な現実描写の中に幻想的な仮定を平然とはめこみ、読者に媚びないユーモアと新鮮な表現で独自の世界を築いたエーメは、いつまでも人気の衰えない作品を多数残している。どちらかというと長編より短編が得意で、戯曲や童話の傑作も残している。彼の『クレランパール』という喜劇は、かつて日本でも文学座で上演され、好評を博した。

今号ではこのマルセル・エーメについて紹介しよう。

新聞記者から作家へ

マルセル・エーメは1902年、ジョワニーに生まれ、1968年パリのモンマルトルで心臓発作で急逝した。66歳であった。その生涯は波乱に満ちている。父は蹄鉄工であった。エーメは六人兄弟の末っ子でめくまれない家庭環境の中で育った。エーメの母は二歳のときに病死し、以来、母の実家・瓦工場を経営していた祖父母に預けられた。したがって両親の記憶はほとんどないという。

最初、エーメはエンジニアになりたいと思った。受験勉強をブザンソンの高校ではじめたが、病気で断念。20歳で兵役を終え、パリに出、食べるため、いろいろの職業を経験した。保険の外交員、映画の端役、石工、デパートの店員、市場商人の相棒など転々とし、最後に新聞記者になった。ところが新聞記者としては、余り認められなかった。無能のジャーナリストといわれた。彼はこういつている。

「見聞きしたことしか記事にできないのでダメな記者だった。せめて細部は脚色したり、でっちあげなければ仕事にならない世界だから……。おかげでたくさんの方の没原稿を書いてしまった」。しかし、新聞記者生活から、ものを書くことの喜びを感じるようになる。

1926年、処女作『ブリュル・ボワ』を発表する。筋は田舎の郡長にまでなりながら、アルコール中毒のため、浮浪者に落ちぶれたブリュル・ボ

ワを主人公にフランスの田舎町 (ブルゴーニュ地方) の生活を如実に浮かび上がらせたものである。この作品は好評で、さっそく文学者協会賞を受賞した。その後、記者を続けながら、いくつもの作品を発表、1930年『名前のない街』でポピュリスト賞を得たのをきっかけに、記者をやめ作家生活にはいった。1933年、『緑の牝馬』を発表、名声と地歩を確立した。

この小説は日常生活で普通気付かれない細部の描写を交え、比類のないフランスの農村生活を再現したものと評価された。馬の肖像画が屋内の男女の行動を報告し、人間の姿を伝えるという章をはさみ、着実な写実主義的手法に斬新なイメージを持つ文体で読者を魅きつけてやまない。映画化もされた。

ファンタジックな傑作『壁抜け男』

わが国の有名な作家・中村真一郎は『壁抜け男』というマルセル・エーメの短編集 (早川書房刊) を訳しているが、そのあとがきでこう述べている。

「この本は本文から読みはじめて下さい。そうすれば私が、作者について、その作風などをこの『あとがき』で論ずるのが、バカらしくなっている気持ちが判っていただけたと思います。この短編集について、訳者がなにか読者に向かって、巻末に蛇足をつけ加えようとするれば、もっともらしい理屈を列べるよりは、訳者自身がなにかエーメ風の出たためて痛快で、悪ラツなウソの話をひとつ書いてみせるより仕方がないようなものです。——ということが、この本のなかのどの一編を読んだだけでも読者には納得いくでしょう」

この本には表題の『壁抜け男』のほか、『カード』、『よい絵』、『パリ横断』、『サビーヌたち』、『パリのぶどう酒』、『七里の靴』の6作品が収録されている。

「心優しきファンタジストが贈る奇想天外、痛快な物語集！」というリードがついているが、全くその通りで、筆者も思わず魅きつけられて一気に読んでしまった。

いま紙数の関係で全部を紹介することのできないのは残念だが、最もエーメらしい作品『壁抜け男』 (Le passe-muraille) の粗筋を紹介してみよう。



マルセル・エーメ

——モンマルトルのオルシャン街75番地の4階にデュチュールという名前のすぐれた男が住んでいた。この男は不思議な才能の持ち主で、なんの苦もなく壁を通り抜けることができるのだ。鼻眼鏡をかけ、黒く短いやぎひげをはやしたこの男は、登記庁の3級役人であった。デュチュールが自分の能力に気がついたのは43歳の年になってからだった。この奇妙な能力は、彼がそうありたいと望んで生まれたものではなかったので、いささか彼を面くらわせたのも当然である。

そこで彼は近所の医者に症状を打ちあけると、2種類の薬を服用するように指示された。最初の一袋を飲んだのち、あとは全部、引き出しにしまっておいた。ということは壁を通り抜ける能力を保存したかったわけだ。

彼の勤める局の次長が転勤となり、新しい次長がやってきた。彼はデュチュールを無能とののしり、事務室の隣の物置小屋に閉じこめ、そこで仕事をするように命じた。頭にきたデュチュールは次長の部屋との境の壁に入った。そして次長の部屋へ壁から頭を出し「次長はバカでトンマでならず者だ」と怒鳴った。デュチュールの頭を見た次長は恐怖におののいた。それをデュチュールが毎日、繰り返したので次長はとうとう発狂し、精神病院に入ってしまった。

デュチュールは得意となり壁抜けで悪事がしなくなった。セーヌ河の右岸にある大銀行へ行き、1ダースもある壁や仕切りを通り抜け、金庫をこじあけ、多額のお金を盗むことに成功した。帰りぎわ、赤いチョークで「狼男」と仮名のサインを残した。翌日、あらゆる新聞に事件が大きく掲載された。それに気をよくしたデュチュールは毎晩のように銀行や宝石商や金持ちの邸宅などを舞台に荒し回った。警察を鼻先であしらい、つぎつぎに手柄を立てる「狼男」に夢想家の女性は、身も心も捧げたいと憧れるまでにいった。

役所でも「狼男」の話でもちきりになった。

デュチュールは「ねえ諸君＜狼男＞はこのわしだよ」といったら周囲は爆笑した。こんな男が＜狼男＞だなんてと、だれも信じてくれないのだ。数日後、＜狼男＞は宝石店に入り、夜警にわざとつかまった。デュチュールは自分が＜狼男＞であることを、みんなに知らせたい欲望にかられたからである。

翌日、新聞がデュチュールの写真を掲載すると同僚たちは腰を抜かさなばかりに驚いた。しかし、そのために刑務所に入らなければならなかった。それでもデュチュールは平気だった。簡単に刑務所の壁や塀を抜けて町に出た。

町を歩いているうち、ブロードの美人に惚れこんでしまった。声をかけると美女もまんざらではない風情で話に応じた。美女は人妻でやきもちやきの主人にうんざりしていた。主人は外出するとき、美女を部屋に閉じこめ、二重にカギをかけ、窓のよい戸にまで南京錠をおろすのだという。そのくせ主人は浮気をして、夜はほとんど帰らないと報告した。「それじゃ、今夜、ぼくがたずねるよ」とデュチュールはいい、ノルヴァン街の家に塀を越え、壁を抜けて行き、囚われの美女の部屋に入った。美女は熱狂して彼を迎え、2人は夜のふけるのを忘れて愛しあった。

翌日、デュチュールは頭痛に悩まされた。そこで引き出しの中にあった例の薬を午前と午後、一服ずつ飲んだ。頭痛がなおったので、また美女との密会を楽しんだ。帰るとき美女の家の壁や仕切りを通り抜けながら腰や肩がいつになく、こすれるような感じがした。続いて厚い塀の中に入ったとき、彼の体は動かなくなってしまう。突然、あの薬を飲んだことを思い出し、ぞっとした。こうしてデュチュールは塀の中に閉じ込められてしまったのだ。その終わりはつぎのように表現されている。

「・・・いまでもまだ、彼は石になってしまわないでそこに入っているのだ。パリの街のどよめきが静まった深夜、ノルヴァン街を通る夜遊び好きの人たちは、きつと墓の彼方から聞こえてくるような鈍い人声を耳にするだろう。彼らはその声を、ビューと辻で吹きささぶ風の音と思うだろうが、それこそ輝かしい生涯の終わりをなげき、あまりに短かった束の間の恋を悔やむ＜狼男＞デュチュールの泣き声なのだ——」

筆者の説明ではその面白さは伝わらないかも知れないが、奇抜な幻想と現実世界の重い構造がうまく織りまぜられ、その作術は感心するほかない。エーメは戦後、前述したように戯曲のほうにも進出し、『クレランパール』、『他人の首』、『四つの真理』、『月の小鳥たち』の戯曲を発表、各地で上演され絶賛された。童話の分野では均整のとれた一連の童話『おにごっこ物語』、大人のためのすぐれた童話『とまり木の猫の話』などが注目作となっている。

マルセル・エーメはフランス文学史上の巨匠・大作家といわれるほどの存在ではない。しかし20世紀に出現したファンタジックな魅力ある作家としての名は忘れ去られることはないだろう。ブルゴーニュとパリを主とした小説、戯曲、童話の数々はこれからも多くの読者を獲得するにちがいない。



ジョワニー Joigny

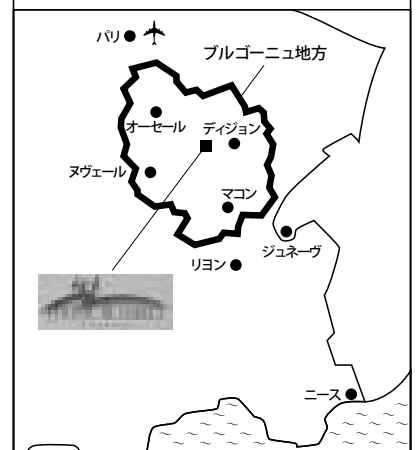
島野 盛郎 / しまの・もりお
1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいるー越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）などがある。



Château de Chailly / シヤトー・ドウ・シャイイ

ブルゴーニュへようこそ。

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ↓

(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087